

児童養護施設退所者の高校卒業後の進学における考察

～ 進学に至ったプロセスの視点から ～

A Study of Student Leaving Children's Home After High School

～ From The Perspective of The Process of Going to School ～

越後美由紀 *Miyuki Echigo*

(人間発達学部)

I. はじめに

1. 研究の背景と目的

児童養護施設や乳児院、里親等の社会的養護のもとで養育をうけた子どもたちは、高校卒業後の進学が少ない現状にある。全国児童養護施設協議会（以下、全養協とする）の「平成17年度児童養護施設入所児童の進路に関する調査報告書」（児童養護施設のうち約60%が回答）によれば、児童養護施設入所児童の大学、短期大学、専門学校等（以下、大学等とする）への進学率は、9.3%であり、全国が47.3%である。全国の進学率に対して非常に少なく、1割にも満たないのが現状である。しかし、高校卒業後に進学を実現している子どもが少数ながらもおり、また、「児童養護施設入所児童等調査結果」（2008年厚生労働省）によると、中学3年生以上の年長児童全員の大学等進学希望者の割合は25.7%（前回2003年調査21.4%）、となっており、前回調査より進学希望者が増加している傾向にある。

児童養護施設で生活を経験した子どもたちにとって将来の生き方や職業選択の幅を広げるためには、高校卒業後に大学等への進学率を更に高める必要があると思われる。しかし、高校卒業後の進学者が少ない理由には、経済的な不安、学力の不安、家族との関係の課題など様々なことが考えられる。特に、経済的な理由から大学等進学への進路選択をせず、高校卒業後に就職をする例はよく知られている。しかしながら、実際に高校卒業後進学に至った例をみると、経済的な不安が少ない子どもが進学しているとは限らない。経済的課題が主な理由で進学を断念した例もあるが、それだけではない他の要因により進学に至らないこともあるのではないかとと思われる。

そこで筆者は実際に進学に至った事例において、どのような過程があって、進学への動機づけに繋がったのか、また実現可能となったのかに注目することで他の要因を探ることができるのではないかと考えた。進学を選択する動機づけやプロセスに着目し、どのような過程のなかで高まったのか、実現に至ったプロセスや可能となった要素に焦点をあてた研究はあまりみられない。

本研究では、児童養護施設退所者で、現在において高校卒業後に進学をしている学生が、どのように進学することに至ったのか、その進学までのプロセス（以下、進学プロセスと

する)を検討することにより、実現可能となった要素を検討する。そして、今後の児童養護施設入所児童における高校卒業後の大学等進学への可能性を広げるための示唆を得ることを目的とする。

2、研究方法

まずは①高校卒業後進学者の現状について先行研究の検討、②児童養護施設退所者で、現在、大学等へ進学し、在学中の学生 1 名に対し、ライフヒストリーインタビュー調査を実施、③インタビューの対象者事例から、ライフヒストリーの分析により進学プロセスを検討し、実現可能となった要素を考察する。

II. 先行研究の検討

児童養護施設入所児童の進路進学問題を検討するなかで、まずは義務教育終了後の進学状況を見てみると、一般児童との比較において、入所児童の進学状況は著しく不安定である。全養協による平成 17 年度の進路調査報告では、入所児童の高校進学は 87.7%とされ、一般児童の水準 97.6%との開きがあり、高校中退率をみると、一般児童が 2.1% に対して入所児童は 9.3%とさきわめて高いという結果がある。早川⁽¹⁾は、高校の中退の多い状況の要因として考えられることは入所児童の低学力が指摘されるとし、家庭で適切な養育環境になく、十分な学習ができなかったこと、虐待の影響で自尊感情が育まれていないこと等、低学力に至った要因もさまざまに考えられると述べている。

そして、高校卒業後の進路状況については、全児童養護施設 557 施設への調査依頼で有効回答率 59.2%の 330 施設において 2004 年(平成 16 年)に全日制・定時制課程の高校を卒業したのは 840 人中、7 割が就職しているが、全国データ(一般児童)では就職した者は 2 割弱である。また、児童養護施設児童の進学の状況では、進学しない児童が 76.9%、高校卒業後何らかの進学をした児童は 2 割にすぎない。大学等(4 年制大学、短期大学、専門学校等)進学者は全国データ(平成 17 年度学校基本調査)では 47.3%であるが児童養護施設は 9.3%と 5 分の 1 以下である。こうした現状について早川⁽²⁾は、高校卒業後の進路状況では、「大学全入時代」注 1)といわれてきている今日、「高卒」「大卒」といった形式的な学歴と、入学時点における学力との直接的な相関が成り立たない時代を意味するとし、学歴は、学費の支払い能力と結びついていること、一般児童と入所児童の違いはこの点にある、と述べている。

児童養護施設入所児童は高校卒業後に進学した場合、生活費すべてを独力で賄う場合が多く、入学費、学費の負担も非常に大きいため経済的困難な状況が生じてくることが想定される。それらの費用を賄うためのアルバイトをしながら授業に出席する時間を確保しなければならない。しかし、こうした経済的な課題が事前に予想されるということのみが高校卒業後の進学率が高まらない主たる理由なのであろうか。

村井⁽³⁾は、自立についての捉え方として「自立とは何でも一人でできるようになるこ

ととは捉えず、自分でやろうとする意欲や主体性をもち、経験の中から学んでいく姿勢をもつこと」と捉えている。児童養護施設を退所した子どもたちの多くは不適切な環境の中での育ちにより、自分で何かをやろうとする意欲や主体性が育ちきれていないことが多い。長谷川⁽⁴⁾は、児童養護施設が自立支援を行う上で、信頼関係、自己肯定感を築くことが必要である、と述べている。そのために、特定の信頼できる大人や友達との関わりから信頼関係を構築することや、子ども自身が自分の存在、愛されていると感じることで自己肯定感が高まり、自立支援に繋がること、これにより、自分が生きることに向き合い、進路など自分で考え選択し決定して主体的に生きようとする気持ちを育むことができるのだという。

これらの自立の捉え方からすると、高校卒業後に進学という選択肢を自ら決定して選ぶというプロセスには、意欲や主体性がその子ども自身の中にどれだけ経験の中で育まれてきたのかということが重要になってくるのではないかと考える。つまり、経済的理由以外にも、児童養護施設や家庭で養育されていくプロセスの中で特定の信頼できる大人や友達との関わりからの信頼関係構築、愛されている実感からの自己肯定感がどこまで獲得されているかということも重要な要因となるのではないかと考える。

ライフヒストリーによる分析を行っていく中で、こうした視点を焦点におきながら、進学に至ったプロセスを検討していく。

Ⅲ. 調査

1、調査対象と倫理的配慮

本調査の対象者として、専門学校に在学中で、児童養護施設を退所した20歳代後半の成人男性（以下、A氏とする）を対象にインタビューを実施した。インタビュー時間は約3時間程度、半構造化面接を個別に実施した。

本調査は個人の生活史に深く入り込み、私的なことが中心になってくるため、プライバシーと深く関係する。そのため、インタビューに関しては、開始前に本調査の研究の主旨を対象者に説明すると共に、インタビュー対象者のプライバシー保護について最大限の配慮を行うこと等を示した文書を提示し、「依頼文および同意書」として署名をいただき了解を得た。また論文内容については、事前に読んでもらい承認をいただくといった、倫理的配慮を行った。

2、分析方法

インタビュー内容の録音記録に基づき逐語録を作成した。対象者のライフヒストリーを年表として表し、語られた内容を幼児期、小学生期、中学生期、高校生期、就労期、就労・進学期の6つの時期区分に分け、更に家族状況、対象者の生活状況、対象者の学校・職業状況、家族の経済状況、対象者の心情といった5つの枠組みでストーリーラインを表1のように記した。その後に来来事とその時々的心情の関連について分析した。

以上のような聞き取りで本研究のライフヒストリーによるインタビュー、分析の方法を用いた理由として、まずは量的調査では得られない本人の聞き取りからうかがえる主観的意味づけに接することができ、その意味づけの変化のプロセス、本人や家族、施設職員、周囲の友人等をめぐる相互作用など、一連の過程の変化、時系列的な変化を知ることができるからである。また、感情のデリケートな部分、例えば、これまで語りにくかった虐待体験、施設入所中の心境、家族への思いなどの意味づけ、必ずしも一貫していない気持ちの揺れなどにも接近することができるからである。

ライフヒストリー法は、個人の生活構造（あるいは生活世界）に焦点をあてていることが挙げられる。また、時間的パースペクティブを内蔵しているので、対象者を過程として把握することが可能であること、全体関連的な対象把握を志向すること、そして、主観的現実には深く入り込み、内面からの意味把握が可能である（Ken Plummer⁽⁵⁾）という特性をもっている。

こうしたライフヒストリー法の特徴が、本研究の目的である、児童養護施設退所者で、現在において高校卒業後に進学をしている学生が、なぜ進学することができたのか、その進学プロセスを検討するにあたり適した方法と考えられた。つまり、過去から現在にいたるまで、対象者の生活状況や家族、社会関係、心情などを丁寧に聞き取ることでそこからのような変化や心の揺れが生じ、進学という進路選択に至ったか、相互の関連性や要素を探索することができると考えられた為、適用することとした。

IV. 結果と考察

【事例概要】

A 氏は、現在 20 歳代後半の男性である。A 氏が 1 歳の時に母が行方不明となり、父子家庭となる。経済的理由により A 氏は 3 歳の時に B 児童養護施設に入所した。父が同い年の連れ子のいる女性と再婚し、小学校 1 年生で家庭引き取りとなる。しかし、父と義母との間に子どもが生まれ、A 氏は世話をしたり、家事を手伝わされ、学校に行かせてもらえない日もでてくる。更に、義母から叩く、蹴るの暴力やフライパンで頭を殴られるなど身体的虐待を受けていた。A 氏は義母からの虐待の理由により小学校 4 年生に再び B 児童養護施設への入所となる。入所後は、たばこを吸ったり中高生らに誘われて夜中に遊んだりという荒れた生活となる。しかし、中学校に入学しバスケットボール部への入部をきっかけにこれまでの荒れた生活を一転させた。バスケットボールを頑張ることで周囲から認められ、支えられ自分への自信に繋がっていく。高校にはバスケットボールの特待生で入学できたが、膝を壊してバスケットボールを続けられなくなる。それからは遊びが中心の生活となり、何日も無断外泊をし、高校 3 年の 7 月に無理矢理に施設を退所、アパートで一人暮らしをしながら高校を卒業した。卒業後は父が離婚後に転居した他県へ A 氏も移ることを決意し、父と一緒に生活をする。アルバイトをしながらアパート代、光熱費

表1 A氏 ライフヒストリー年表

時期	家族状況	A氏の生活状況	A氏の学校・職業状況	家族の経済状況	A氏の心情
①幼児期	1歳、母行方不明 父方伯父、叔母の協力を得て育つ。 父、再婚する。(同い年の連れ子)	3歳 <u>B施設入所</u> *経済的理由		父、建設業	
②小学生期	父と義母の子(妹)生まれる。 夫婦喧嘩絶えず	小1秋、 <u>家庭引取り</u> 妹の世話 義母から「学校にいくな」といわれ、「叩いたり蹴ったり…」がある。「フライパンで頭カーン(殴られ) …気失って」 小4 <u>B施設入所</u> *義母による虐待の理由 入所後は「タバコ吸って」いたり、「夜中とか遊んだり」。	小学校に行ったり行かなかったり。 「勉強もできない」「言ってること変だったらしい」		<u>義母がいる家には「帰らない」(a-1)</u>
③中学生期	父、義母と別居し、単独で転居を繰り返すD県からE県、F県へ。	「タバコも夜遊びもやめた」。 施設職員や部活の友人父母からよくしてもらった経験。 C職員(女性)がA氏の担当職員となる。 C職員と半年ぐらいいきかない時があった。(b-1) 膝を壊して手術、入院 C職員が毎日見舞いに来てくれた。(b-2)	<u>バスケット部入部(a-2)</u> 「かなり頑張った」自分が「一番上手かった」 →自信へ 「バスケ頑張ることで特別扱い」してもらえた優越感。	父、会社倒産 父、自己破産	バスケット部の先輩との出会い→憧れを抱く。 「家に帰りたい…義母がいるならまだこっち(施設)にいよう。…何で離婚しないんだ?…妹、弟がいるから離婚できないんだろうな…」→複雑な心境 父のF県への転居を知り、「本格的に捨てられたんかな…」
④高校生期	修学旅行先で父と会う。 父、離婚成立	高3春 「遊びほうけて、遊びほうけて」 「何日も無断外泊」 高3の7月に「無理やり施設を出た」 <u>B施設退所</u> アパート借り一人暮らし、高校通学(家賃光熱費は父負担) C職員はA氏退所後も、連絡を定期的にくれる。(b-4)	高校入学 「バスケの特待で」 <u>膝を壊してバスケをやめる。</u> <u>→目標を失う。</u> <u>(a-3)</u> A氏、アルバイト月7万 高校卒業	父、F県にて塗装業	「くさってたおいらを…見捨てず…面倒見てくれた」C職員の存在(b-3)

<p>⑤就労期</p>	<p>父と共に2人で生活する。</p>	<p><u>A氏は父のいるF県へ転居</u> 父の住むアパートで一緒に暮らす。(a-4) 父との生活始まる。(家賃光熱費は父の支払い) 「友だちつらくないと面白くない」スナック通い。付き合いにお金かかる。</p> <p><u>交際相手との別れ→目標失う</u> (a-5)</p>	<p>パチンコ屋に勤め、2ヶ月でやめる。</p> <p>宅配業に転職(3年続く) 日給1万4～5千円で月30万程度収入。 夜中の勤務</p> <p>交際相手との結婚を考え始め、転職を決意。 金物屋配達営業(現在も継続、5年ほど経過) 昼間のアルバイト勤務 時給千円で週5日</p> <p>貯金5～6万</p>	<p>「(父が) F県にいるじゃん」。「とりあえず行ってみようかな」</p> <p>C職員から「一週間に1回はメールくるね」「毎年誕生日と、母の日には、…プレゼント贈ってる。」(b-5) →A氏にとっての母親的存在のC職員</p> <p>「夜勤だから、普通の日常生活に戻ろうかな」 「昼の生活にして社員とかになれば、結婚しようか…」</p> <p>「この仕事好きでもないのに死ぬまでやるんかな」 施設のC職員の顔が思い浮かぶ。「おれもそういう職員になってみようかな。」B施設で働こうかな…」(b-6)</p>
<p>⑥就労・進学期</p>		<p>昼間働き、夜学校へ行く。 学費のみ自分で負担する生活 掃除、洗濯、食事は父がすべてやってくれる</p>	<p><u>G専門学校夜間部(保育系)へ入学</u> (a-6)</p> <p>「1、2年のとき、ずっとH先生と(学習)ノート交換して。」専門学校で学習の個別フォローをもらう。</p> <p>学費滞納中 「大変っていうか、全然追いつかん」</p> <p>在学中</p>	<p>「漢字とか全くわかんないじゃんね」「小学校の時ちゃんといてれば…」 「不安だらけだけど…助けられて」 「進学してよかった」 実習に行くことで、「おいら(施設の)職員に絶対向いてない…なんかやっぱ子どものまんまなんだよね」</p>

は父に頼る。その後しばらくして、自分の将来を考えはじめ、専門学校への進学を決意し、現在もアルバイトと通学を両立している。

以上の A 氏のライフストーリーの全体像は表 1 に示したとおりである。以下の考察の該当箇所と「表 1」内の位置が照合できるように、アルファベットとナンバーにより記載する。「a」と示した箇所はライフストーリーにおける転機となった出来事、「b」で示した箇所は C 職員と A 氏との関係性を示している事項である。又、図表の「」内の言葉及び、以下に示す分析結果のゴシック体の部分は逐語録から引用した A 氏の語りである。

(1) 生活することで精一杯「幼児期・小学生期」(表：a-1)

①義母のいる家庭には帰りたくない

同い年の連れ子もいたんだよね。で、(義母は) そっちには普通で。おいらのほうには、学校も行かせない。掃除、めし、あとその妹(異母きょうだい、0歳)の面倒見ろとか。……一緒に住んだけど、虐待がすごくて……当時は過酷だったからね。最後の決め手が小学校4年生だったから力ついてきちゃって、(自分が)反抗しちゃって……なんか蹴っ飛ばしたら……(義母が)フライパンで頭、カーンって行ってヒューって(自分が)気い失ってって気がついたときに親父がいて、あっ、もうこれ死ぬなって。……児相の先生に聞かれた時に(自分は)「(家には)帰らない」って行って B 施設に行くことになったみたい……。

②学校に行ったり行かなかったりで勉強もできない

(学校は)月曜日行って、火曜日行かないとか、水曜日行って、木曜日行かないとか……勉強もできないしさー。学校も行ってないからね。……勉強なんてホントだめだよ。……後からやろうつたって、できないもんね。

③施設入所して自暴自棄

たばこも夜遊びも……小学校4年生ぐらいかな。B施設に帰ったとき。……夜中とか遊ぶのも。先生がでたのを確かめて。

これらの語りからは、当時小学校低学年であった A 氏が日々義母との生活で気をつかしながら過ごし、言われたことに従って家事や育児を強要され、学校に行かせてもらえないといった、教育を受ける権利を奪われてきたことが読み取れる。また度重なる身体的虐待という危機的状況へ抵抗感を示し始めた小学校中学年に、生死にもかかわる状況へエスカレートした出来事を契機に施設入所となっている。日々の生活では常に身の危険が脅かされており、勉強する環境にはほど遠く、生きることに精一杯の時期であったことがうかがわれる。施設入所してからは、身の危険に関する安全は保たれたが、信頼できる大人の存在がまだ感じられない状況であったか、繋がりの感触がもてないことでの喪失感などから自暴自棄の行動に繋がったのではないだろうか。

(2) 自信をつけさせてくれた「中学生期～高校生期(2年)」(表:a-2)

①バスケットボール部との出会いから目標に向けて無我夢中の学生時代

B施設の中に体育館があって、バスケットゴールも……ついてて、自分らより上の人ら(先輩)とずっとバスケやってた。だからちょっとうまかったんだろうね。他の人より……で中学校の先輩でめっちゃうまい人がいて……選抜とか選ばれて……じゃ、おれも選抜になるって。その、めっちゃ練習して……

②頑張ることで認めてもらえた

バスケ頑張ることによって、そのB施設の職員の対応とかも、ちょっとなんか、特別扱いしてくれるみたい。洗濯も一、夜遅く帰ってくるからさあ。ごはんも食べるし、風呂も入るじゃんね。「洗濯もん、だしときなよ」みたいな。普通だったら自分で……洗わないといけないけど、やってくれたり。後は、友達の父ちゃん、母ちゃんとか、すごい良くしてくれた。……すごいヨイショしてくれて。周りがでかかったかな。……(友達の父母からは)施設にいた方が、見方がちょっとオーバーに見てくれる。……だからちょっと得したときもあるよね……おいらには(施設職員は)結構大目に見てくれてた。どこ行ってもバスケ繋がりだろうっていう頭あったし。

中学に入ってから、バスケットボール部へ所属したことをきっかけに、得意分野を頑張れば、施設職員や友人の父母らから褒めてもらえる、認めてもらえるという経験をし、更に自分が特別に見てもらえることに繋がり、優越感、自信を獲得していくことになったことがわかる。「頑張れば褒めてもらえる、良くしてもらえる、だからまた頑張る」という好循環となっていった時期といえる。また、職員からも部活の繋がりでのつきあいには寛大に見てもらえ、信頼を得ていたこと、そのため比較的自由に行動させてもらえていた実感をもつ。

(3) 目標の喪失から彷徨う「高校生期後期(3年)」(表:a-3)

①膝の怪我での退部後、遊びが中心の生活へ

中学校で1回膝ぶっ壊して、手術とかしててさ。それを何回も繰り返しながら、ごまかしてやってただけど、とうとう無理だってことになって。3年生の春かな、結局(部活)やめちゃって。そっから、もう遊びほけて遊びほけて。……カラオケとかさー。夜中、居酒屋とかさー。……酒の匂いぶんぶんさせながらB施設に帰ったりとか。

②施設での居場所のなさから出たい気持ち

それが原因で、……高校3年生の7月ぐらいに無理矢理施設を出た。

その時には離婚も成立してて、親父が。F県にいるってことも知ってて。だから、ある程度落ち着いてると。でもう、それにのっかって。おれはB施設をでるんだ、と。……何日も無断外泊したり……いろんな言い訳つけて。……で、結局親父に、家賃、水道、光

熱費払ってくれと。そのほかの食うもん、服、全部自分でやるからっつってやすい……アパート探して。保証人は……園長……面倒みてくれたね。

その。だから部活やめたあと、腐ってたおいらを、その人(C職員)だけ、見捨てず、ずっとなんかかんか面倒みてくれたり……1人暮らしした後とか。ごはん、くってる?とかさあ。……だから、もう、1週間に1回は(今でもC職員から)メール来るね。で、(C職員に)一応、毎年誕生日と、母の日には、こっちきてからずっとプレゼント贈ってる。で卒業式もちゃんと来てくれるって……

この時期はA氏の「部活を頑張れば認めてもらえる」という、これまでの好循環が成り立たない事態に直面する。部活ができないことが頑張れるものを失い、認めてもらえない自分となる。目標や自信の喪失と共に、これまで抑制してきた自由に遊びたい欲求も重なり、悪循環となっていく。夜中に遊び回る生活が施設職員からの信用を失い、叱られる機会が増え、施設での居場所をなくし、更には施設を退所したい欲求へと暗転した。結果的に施設を退所し、遠方のF県に在住している父の経済的支援を得ながらアパートを借り高校卒業までアルバイトでやりくりをする。自分の思いや意志を無理にでも押し通していこうとするA氏の自己抑制が困難な一面ではあるが、自己決定したことについては最後までやりとおす継続性や根気強さについては部活などで養ったものでもあり、自活して卒業するという新たな目標に向けて前進する契機ともなっている。また、部活を退部して遊びが中心の生活になった際に、職員から叱責を受けることが多かったA氏であるが、そのような状況であっても根気強く関わり続けたC職員の存在があった。退所後の自活生活を側面的に見守ってきたのもC職員であり、施設職員にとって期待に反する行動であってもA氏の身の周りの心配をし続け、連絡を取り続けたその存在感は大きかったことが読み取れる。

(4) 父との時間をとりもどす生活が始まる「就労期」(表:a-4)

①父との生活が始まり、不規則勤務で働き続ける

高校卒業式が終わって何日かたってすぐ、3月×日に(父の住むF県に)きたんかな。……家賃とか、全部そういうのは親父で。基本的に親父が殆どやってる……掃除とか洗濯、食事。うん、素敵なパパ。たまーにおいらが早く帰ってきたら流しに食器いっぱいあるからさ、早かったらおいらがやるかなみたいな。暇だったら洗濯しよっかなって。基本ベースは親父かな。

バイトでパチンコ屋入って2ヶ月ぐらいですぐやめて。そっから(派遣で宅配業者で)働いて。月30万ちょっと。時間長いけどね。夜中、夜の8時7時から、朝の8時7時9時とか。……3年ぐらいは。

卒業後すぐに父を頼って転居し、一緒に生活をするが、父が生活の大半をやってくれている。その状況にA氏は素直に父の誠実な姿として受けとめ、自らも生活に協力してい

こうという意志が働いていることがわかる。親子関係を再構築しはじめた時期である。

生活基盤は父に頼ることで比較的安定しているが、就労では不安定な状況がみられ、アルバイトや派遣業という形態で夜中勤務の不規則な生活となる。しかしA氏自身で自ら動いて決めた職種であり、体力的に厳しい職場でも根気よく継続している。

(5) 将来を見据え始め生活基盤を考え直す「就労・進学期」(図表：a-5, a-6)

①夜中働く仕事から昼間の仕事への望み

それ夜勤だから……普通の日常生活に戻ろうかなって思って……ちょっと将来考えたんかな……結婚ももうそろそろとか……彼女いたんかな……昼の生活にしてうまくいって社員とかになれば結婚しようかなって考えたんかな。

②目標を喪失したときに、どんな時も支えてくれた存在としての施設職員像

今の(昼間の)仕事について。もうこれでやっていけるかなって考えてたときに(いろいろあって)そんな時の彼女と……バーンと別れて。えっ、おれその(彼女の)ために仕事場変えたのに……目標もなくなったし。この仕事好きでもないのに死ぬまでやるかなって考えて。その時にばあって浮かんだのが、今でも連絡とってる、施設の先生。もう、絵柄が出てきて、あー、ちょっと、おれもそういう職員になってみようかなって。で、それが(進学の)きっかけかな。

③進学して学費のやりくりの苦労と勉強不足への後悔と努力

(貯金は)5~6万……しかなかった。……(父には)保育士とればB施設で働けるんだって、みたいなこと言ったら、親父も「はあ？」っていいながらもなんかこう嬉しそうな顔してた。施設にいたのは100%嫌ではなかったんかなって。いいこともあったんかなって思ったんじゃない。

学費は自分で……大変っていうか、追いつかないよね。ぜんぜん追いつかん。結局滞納してるもんね。

不安だらけだけど、何とか3年までこれだからね。助けられて。会社に(友だちに借りた)電子ピアノもってって…昼休憩に弾いて。……漢字とか全くわかんないじゃんね。1~2年の時、専門学校でH先生と学習ノート交換してて。

④自分自身の振り返りのきっかけ——自己洞察

(進学してから)思ったんだけどね。おいら職員に絶対向いていない。おいら何かやっぱり子どものまんまなんだよね。その、施設の見方が。実習とか行っても、ボランティアとか行ってもさ、すごいもう楽しけりゃいいじゃんみたいな。この子はこういう風になるために、こういうのを後押ししてますっていうみたいな……どうでもいいじゃん、楽しければ……という考えしかないし、やっぱり職員を見ちゃうよね。子どもをこう観察するとかじゃなくて。この職員はどう思っているんだろうみたいな。……やっぱりそのまま職員になってもたぶんダメかもしんない。

実習に行って楽しかったけど……なんかやっぱただ単に褒められたかったんかになっていうのもあると思う。その、施設出身で、なおかつ学校行って、施設に戻って働いてますって。なんかこう、すごいねって言われたい自分もいたのかなと。うん。というのたぶん少しはあったかな。……今はもう、働くのは自分じゃなくてもいいんかになって。

進学しながら就労を両立させる前後の時期の語りでは、将来の自己像を現実的に捉えていく A 氏の心境の変化が感じられる。安定した就労への願望と自分の将来を形成していくステップを踏むための自己決定する段階である。金銭的な余裕はほとんどないなかでも施設職員となるため保育士資格取得という新たな目標をもち、それに向かおうとする意欲が芽生える。そのきっかけを導いたものは目標を失いかけたときに A 氏の意識に上った B 施設の C 職員（女性）の存在であった。唯一 A 氏が現在でも連絡を取っている職員であり、成育歴の随所で C 職員からの側面的な支援について何度も語りに登場している。C 職員は A 氏の人生にとって重要な存在としてあげられる。（表：b-1～b-6）

また、新たな目標としての保育士資格取得のための進学を、父に相談をしているが、父の受けとめ方として反対をするわけでもなく、結果的に本人の意思に任せる姿勢をとる。

進学に至ってからは、学費面での苦労は絶えない。預貯金がほとんどない状態からのスタートであり、住居と食費を父との同居により賄っているためぎりぎり成り立っている状況で、アルバイトと通学の両立の困難さが窺える。更に学習面では漢字が全くわからないなど、基礎学力における多くのハンディを負っていたが、仕事の合間をぬっての懸命の学び、学校の教員からの配慮による個人的な学習支援をうけることで何とかフォローされている。

実際に将来の進路選択への心境の変化として、様々な講義の受講、ボランティアや実習等の経験から、多様な考え方や価値観が生まれ、また人との出会いにより、揺れ動きつつも自らをふり返る自己洞察の機会ともなっている。結果的には施設職員という進路選択を断念していくが、A 氏にとって非常に意義深い心境の移り変わりといえる。こうしたことは、進学を選択をしたことで見えてきた自己であり、こうした自己洞察のための時間、多様な価値観や人との出会いは大きな意義をもたらすと思われる。

V. 進学に至ったプロセスから見られる実現可能となった要素

本研究では、児童養護施設退所者で、高校卒業し、現在進学をしている学生が、どのようにして進学に至ったのか、その進学プロセスを検討することにより、進学が実現可能となった要素として、以下の3点を挙げる。

(1) 自信がもてた経験

中学生期～高校生期（2年）の間にバスケットボール部での経験が A 氏の自信に繋がっている。自分の得意分野からの自信、他の子よりも優れていると実感がもてるものであり、これにより特別に褒められるという経験を積み重ねた。それが継続的に集中力を高め、意

欲的に取り組むことの心地良さを体感している。こうしたことが成功体験として自信に繋がり自尊心を育み、主体性をもてる要素となったのではないか。

(2) 目標と自信の喪失時期に支え続けてくれた存在

頑張れるものを失い、認めてもらえない自分との直面があり、これまで抑制してきた自由に遊びたい欲求も重なり、悪循環していった時期があった。そのようなときでも、B 施設の C 職員が継続的に支援をしてくれていた。挫折経験という目標と自信の喪失した時期に支え続けてくれた大人がいたことで自分の存在意義を見失わずに乗り切ることができた。

村井⁽⁶⁾は、相手が主体性を発揮できるような働きかけの手順として「主体性の保障の 4 段階」にまとめており、そのなかで、相手が失敗することから学ぶ過程を「見守る」という援助をあげている。C 職員は A 氏が自己を見失いかけたとき失敗からの学びを見守り続けたことが主体性を取り戻す要素となったのではないか。

(3) 長期的、継続的なつながりのある支え

A 氏が施設を退所してからも C 職員は定期的に生活の様子を気にかけてくれており、退所して 8 年経過してからも連絡しあっている。小木曾⁽⁷⁾は、自立とは、傍らにいて、いつも相談できる、ずっとかかわり続けてくれる存在がいるか否かにかかっていると述べている。A 氏と C 職員はすぐに行き来できる状況にはないが、心理的な距離感が近く、いつも相談できる、ずっとかかわり続けてくれる存在であるといえる。そして、こうした継続的な関わりのおかげで、A 氏は C 職員を 1 つのモデルとして、施設職員への進路選択を思いつくきっかけとなっている。このことは施設で育ったこと、更には自己を肯定的に受けとめ始めたともいえるのではないだろうか。

以上のように、(1) 自信がもてた経験、(2) 目標と自信の喪失時期に支え続けてくれた存在、(3) 長期的、継続的なつながりのある支え、といった 3 点を、A 氏のライフヒストリーから読み取り、高校卒業後の進学を実現することができた要素として考えた。これらは、自立のために重要とされている主体性を形成する要素として共通する内容である。つまり、高校卒業後に金銭的な苦勞という大きなリスクを負ってでも更なる進学に向けて挑戦しようとする意欲を育てたのは、生育歴の中で主体性が保障されるような経験や支援をうけてきたことが影響しているのではないだろうか。

VI. 終わりに ——本研究の限界と今後の課題——

本研究では、児童養護施設退所者の高校卒業後の進学において、ライフヒストリーによる進学に至ったプロセスの視点からの考察を試みた。今回の考察は 1 人のインタビュー対象者に限定されたものであり、一般化はできないものである。他の進学者、大学や短期大学への進学者、乳児院や里親での生活経験のある進学者など、複数の事例をインタビューし比較を行うことなど、今後の課題としたい。

最後に、様々な辛い体験を語っていただいた A 氏に深く感謝の意を表したい。

【引用文献】

- (1) 全国児童養護問題研究会編集委員会編『児童養護と青年期の自立支援——進路・進学問題を展望する』ミネルヴァ書房, 2009年, p89.
- (2) 同(1), 早川悟司「第2章児童養護施設における自立支援の実践と課題 第2節」p92.
- (3) 村井美紀・小林英義編『虐待を受けた子どもへの自立支援～福祉実践からの提言～』中央法規, 2002年, p140.
- (4) 同(1), 長谷川真人「第2章児童養護施設における自立支援の実践と課題 第1節」p87.
- (5) Ken Plummer『Documents of Life』George Allen&Unwin (Publishers) Ltd, 1983年 (= 原田勝弘・川合隆男・下田平裕身監訳『生活記録の社会学——方法としての生活史研究案内——』光成館, 1991,).
- (6) 同(3), 村井美紀「第5章自立と自立支援」p142.
- (7) 同(3), 小木曾宏「第4章虐待を受けた子どもの自立支援ネットワーク」p128.

【参考文献】

- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局『児童養護施設入所児童等調査結果の要点』2008年
- 社会福祉法人東京都社会福祉協議会児童部会リービングケア委員会編『Leaving Care ～児童養護施設職員のための自立支援ハンドブック～』2005年.
- 全国児童養護施設協議会調査研究部編『平成17年度児童養護施設入所児童の進路に関する調査報告書』2006年.
- 谷富夫編『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』第5版, 世界思想社, 2005年.
- 中野卓・桜井厚『ライフヒストリーの社会学』弘文堂, 1995年.
- 文部科学省『平成17年度学校基本調査』2005年.

【注】

- 1) 2007年頃に日本の大学への入学希望者総数が入学定員総数を下回る状況を迎えるとされた状況を示す言葉である。実際には2000年頃から既に入る大学・学部さえ選ばなければ経済的問題などをのぞく入学選抜のみの点では誰でも入学できる状況になっている。